

主要一般分類法における文化人類学の位置  
The Position of Cultural Anthropology in  
Major General Classifications

安 西 郁 夫  
*Ikuo Anzai*

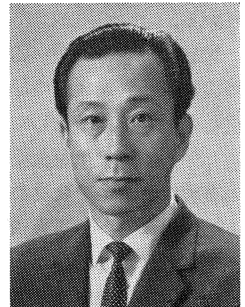
*Résumé*

The writer compares DC, NDC (Nippon Decimal Classification), UDC, LC and BC from the standpoint of cultural anthropology, to examine what position is given to cultural anthropology, how related subjects are scattered, and how extensively the needed topics are covered.

DC is far from satisfaction. Its fatal defect is found in the very vague distinction between cultural anthropology and physical anthropology. NDC is better than DC in that cultural anthropology is treated in Social Sciences, although the relation with folklore is not clear.

UDC surpasses both DC and NDC in the classification of languages together with the provision of the common auxiliaries of race and nationality.

LC is far better than any of the foregoing three in grouping the subjects which compose cultural anthropology. And BC excels the others both in the arrangement and the coverage of component subjects.



序 説

- I. Decimal Classification (Dewey)
- II. 日本十進分類法
- III. Universal Decimal Classification
- IV. Library of Congress Classification
- V. Bibliographic Classification (Bliss)

結 語

序 説

世界の主要な一般的図書分類法において、文化人類学という学問領域がいかなる位置を与えられ、またいかなる取り扱いを受けているかを具体的に検討するのが本稿

の目的である。

比較の対象としてとりあげる主要分類法は次の5種である。

- Decimal Classification (Dewey)
- 日本十進分類法
- Universal Decimal Classification
- Library of Congress Classification
- Bibliographic Classification (Bliss)

本論に入る前に、筆者のいう文化人類学がいかなる学問領域を指示するものであるかを明らかにしておきたい。

安西郁夫：慶応義塾大学文学部図書館学科。 Ikuo Anzai, Executive Secretary, Japan Library School, Keio University.

文化人類学 (Cultural anthropology) は形質人類学 (Physical anthropology) と並ぶ人類学の一部門であるが、形質人類学が遺伝現象によって伝えられる人間の身体的特質を研究の対象とするのに対して、文化人類学は社会的に伝承される人間の文化的特質を研究の対象としている。

文化人類学の類縁語には、社会人類学、民族学、民俗学等があり、これらの語の指示する領域の重なりあいや差違に関しては、百家争鳴の現象が見られ、明確な説明の試みは決して容易ではない。

わが国では、文化人類学は比較的新しい言葉であり、民族学という呼称のほうが歴史が古く、一般的に用いられている。たとえば、この領域の研究者を全国的に組織する学会は日本民族学会 (旧称日本民族学協会) と呼ばれている。

民族学 (Ethnology) は、非西欧的世界の相次ぐ発見に由来する異民族への好奇心にその端を発し、未開民族文化の記述を基礎として、比較研究に向けた学問であり、現存する未開文化を先史文化の残存とみなし、未開民族の研究によって文化史の空白を埋めることが可能であるとの立場から、形質人類学や先史考古学の成果とあいまって人類史を構成しようとの意図を持っている。

民族学と類縁関係にある民俗学 (Folklore) は、その発音が同一であることも手伝って、わが国では混乱を招くことが少なくない。民族学が文明人による未開民族文化の研究であるのに対して、民俗学は文明人による自民族の伝統的文化の研究であり、常民 (Common people) の間で文字によらず伝承される文化を研究することによって、自民族文化の基層・古層を探索するものとされている。従って、民俗学は一国民族学と呼ばれることがある。

前述の説明によって民族学と民俗学の区分点は一応明らかではあるが、日本民俗学の巨星ともいべき柳田国男ですら、二つのミソゾク学が存在することに矛盾と不便を感じ、「どっちかを除かなければならないという必要を自分も感じている。どっちを除くかということは、なかなか実行しにくいことですけれども、どうも私はこっちの方、日本民俗学の方、人扁の俗を使っている方を、どうかしなければならぬじゃあないかということを実は考えている。」<sup>1)</sup> と述懐している。

日本民族・文化を研究対象にとり入れる「民族学者」は戦後急激な増加を示した。これは敗戦によって歴史研究上のタブーが解かれ、民族文化史の真実が異常な熱意をもって探求されはじめたからであり、我々はそのよき例

を岡 正雄、石田英一郎の両民族学者が参加した日本民族・文化の源流に関する討論<sup>2)</sup>に見出すことができよう。いずれにせよ、その対象が自民族の伝統的文化であるか否かによって、民俗学を民族学から識別することは著しく困難となってきた。

この事態を図書館という場で考えてみよう。A国の民俗学的著作は、B国では民族学的資料として意義を持つ場合が少なくない。従って、各国の文献を収蔵する学術図書館では、前述の区分点に基づく識別は時に無意味でさえある。

民俗学は国によってその範囲が異なり、たとえば日本の民俗学は英米の Folklore よりも範囲が広い。このような複雑な要素が絡んでいることを考慮すれば、民族学と民俗学の識別の問題は新しい光の照射によって解決すべきであろう。

日本民族学の総本山ともいべき日本民族学協会は、財団法人的性格と学会的性格を分離することになり、1964年に日本民族学会が新発足したが、その前年の設立準備会では、新学会の名称を何とするかが論議された。その際に、日本民俗学会と合併して日本文化人類学会と名乗ることが提案されたと伝えられている。結局は、古い伝統を持つ民族学という名が冠されることになったが、設立に関する報告の中で挙げられた理由の一つとして、次のことが述べられている。

我が国において民族学という表現が確立していることは、図書館の分類はこの語を用いていることによっても明らかである。<sup>3)</sup>

これは、図書分類にとっては、その権威を高からしめる有難い発言ともいえようが、本末転倒の感がないではない。

文化人類学という語は、アメリカで使われ始めたものであるが、英国では社会人類学 (Social anthropology) がほぼそれに見合う語として使われている。わが国では東京都立大学の大学院が専攻名として社会人類学を使用しているが、民族学や文化人類学ほど一般的ではない。

文化人類学と社会人類学の異同に関しては、さまざまな説があるが、後者は社会組織に力点を置き、現存未開文化を先史文化の残存とは見ず、単純な社会が法則の発見に便利であるが故に未開民族を研究する点において文化人類学と異る、というのが区別論者の一般的な発言である。このような区別が厳に存在するとしても、ある著

作が文化人類学に属するのか、それとも社会人類学に含まれるのかを決定することは、不可能に近いといつてよからう。両者のカバーする領域に大きな差がないとすれば、いずれか一方を統一的な名称とすればよいのであるが、ユネスコが *Social sciences documentation series* の一部として刊行している書誌は、社会・文化人類学 (Social and cultural anthropology) という表現を用い、いずれか一方への統一を避けている。

C. Kluckhohn は、文化人類学を構成するものとして次の7部門を挙げている。<sup>4)</sup>

- 考古学 (Archaeology. 既往の時代の遺物、遺跡の研究)
- 民族誌学 (Ethnography. 現存の民族の習慣と習俗の純粹の記述)
- 民族学 (Ethnology. 過去と現在の諸文化の比較研究)
- 民俗学 (Folklore. 口頭伝承によって保存された劇、音楽、物語の蒐集と分析)
- 社会人類学 (Social anthropology. 近代的共同社会と社会構造の研究)
- 言語学 (Linguistics. 廃用と現用の諸言語の研究)
- 文化と性格 (Culture and personality. 一定の区別づけられる生き方と特徴的心理とのあいだの関係)

以上に挙げられた7部門のうち、考古学は文化人類学

と共通する関心を持つとはいへ、その研究方法は文化人類学の主体のそれとははなはだしく異なり、それ自体がかなり明確な境界をめぐらしている分野だけに、文化人類学の中に含めてしまうことは必ずしも妥当とは思われない。文化とパーソナリティーは社会学との共有地であり、言語学については、その一部が文化人類学に属することは明らかではあるが、かなり広い独立した領域をすでに形成しているだけに、その全体を組み入れることには無理が伴うようである。

以上を整理すると、文化人類学が包含する領域としては、民族誌学、民族学、民俗学、社会人類学および言語学の一部という線が浮んで来る。本稿では、このような領域を総合的に指示するものとして文化人類学の語を使用することをあらかじめ断っておきたい。

### I. Decimal Classification (Dewey)

Decimal Classification (DC) 16版は文化人類学を自然科学の一部門として取り扱っているが、文化人類学は疑いもなく社会科学の一領域であり、これを第5類に属させることには種々の問題がある。具体的には572 (Anthropology) の中に含めているが、Anthropology は Cultural anthropology と Physical anthropology の上位概念であり、572 を Anthropology、573 を Physical anthropology に当て、572 の中に Cultural anthropology を含ませることは、人類学の構造とはマッチしない。このようなイビツな構造は、Cultural

表 1. DC 14・15・16 版の比較

14 版	15 版	16 版
571 Prehistoric archeology	571 Archeology	571 Prehistoric archeology
572 Ethnology Anthropology	572 Anthropology	572 Anthropology
.1 Unity of human race	.7 Cultural or social anthropology	Including cultural anthropology: comprehensive works on cultural and physical anthropology
.2 Diversity of races	.8 Linguistic anthropology	.4 Original home of man
.3 Migrations of men	.9 Anthropogeography	.8 Linguistic anthropology
.4 Original home of men	573 Physical anthropology	.9 Anthropogeography
.7 Savages: races divided by practises	...	573 Physical anthropology
.8 Races divided by language like 400		...
.9 Races divided by countries like 930-999		
573 Natural history of man Somatology		
...		

主要一般分類法における文化人類学の位置

anthropology が単に Anthropology と呼ばれ, Anthropology に広狭の二義が存在するアメリカの一般的な用語法に根ざしているものと思われる。当然の帰結として, 文化人類学に与えられる位置はきわめて低いものでしかない。

文化人類学を自然科学の中に位置させることにも無論利点がない訳ではない。親密な関係にある先史考古学および形質人類学と隣接することが可能であり, 文化と形質の両人類学にまたがる著作に席を与えうることはその利点である。事実 DC は先史考古学 (571) と形質人類学 (573) によって文化人類学を挟みこむサンドイッチ方式を一貫して用いている。(表1参照)

なるほど先史考古学と形質人類学は, 文化人類学に対して, 人類史構成の立場からは相互補完的關係を持ちえても, 研究方法に関してははかかなり異質である。文化人類学と共通する関心領域を持ち, かつ研究方法においても同質である社会科学の諸分野(特に社会学, 民俗学)から隔離するという犠牲を払うほどの価値が前述のサンドイッチ方式にあるとは考えられない。

文化人類学に関する著作の分類に際して常に生起する困難な問題の一つは, 文化人類学と社会学の境界であろう。Malinowski は, 社会学を高文明の研究と規定し, 社会人類学(文化人類学の同義語としての)を現存する未開民族の研究に限定している。<sup>5)</sup> その境界は明白なように見えながら, 現実はずしもなく, いずれともいい難い研究や, 両者にまたがる研究は漸増の一途を辿っている。

301 (社会学) と 572 (人類学) との使いわけについては, E. J. Coates が '社会学者と人類学者との間に専門領域の境界に関する協定ができるまでは, 有文字社会の人類学的・社会学的研究に 301 を使用し, 無文字社会のそれに 572 を保留しておくことが, 一般図書館にとって最も実際的な方策である。'<sup>6)</sup>と述べているが, Malinowski の場合と同じく, 問題は依然として解決されない。これを解決するには, 社会学と習俗・民俗 (390) を両端とする別のサンドイッチ方式が考究されねばならないであろう。

民族学の基礎となるものに民族誌 (Ethnography) がある。16 版の索引では, 民族誌に対して 572-573 が指示されている。572 はさておき, 573 (形質人類学) が指示されているのは納得しがたい。民族誌は, 注記<sup>7)</sup>の趣旨に従えば, 当然 914-919 に分類しなければならないから, 573 の指示は明らかに誤りというべきであろう。こ

れはほんの一例にすぎない。一般に DC は用語法に厳密性を欠く——と指摘するのは過言であろうか。

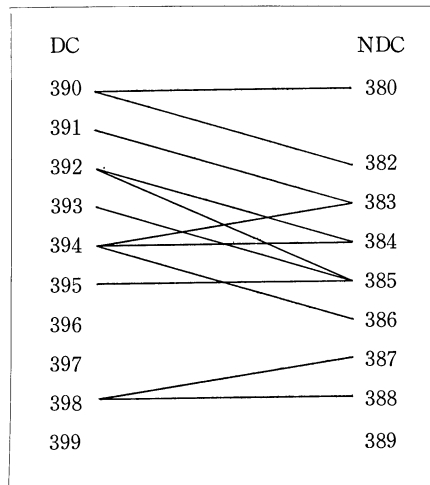
II. 日本十進分類法

NDC 新訂 7 版は民族学(文化人類学)という名のもとに 389 を与え, 第 3 類の社会科学に配属させており, 風俗・習慣・民俗学 (380) および社会学 (361) に接近させている点は DC よりもすぐれている。ただし習俗・民俗学に綱の位を与えながら, 文化人類学(民族学)には目の位しか与えず, あたかも後者が前者の一部門にすぎぬかのような扱いをしている点はマイナスである。文化人類学に対する軽視の態度は, 389 目そのものの記述において, 一層明瞭に現わされている。問題の 389 目は次のような形で示されている。

389 民族学(文化人類学) Ethnology [地理区分]  
[→: 361; 469]

以上がそのすべてであり, 3 センチほどの空白を間に置いて, 390 の国防・軍事が続いている。いかにも匙を投げたかのようなこの素気無さは, 文化人類学という主題の扱いにくさを直截的に反映しているといえよう。

表 2. DC 39 綱と NDC 38 綱の対応関係



NDC の 38 綱は DC の 39 綱に対応するものではあるが, その目は必ずしも一致しない。表 2 は両者の対応関係を示したものであるが, DC にあって NDC にない目は 396 (Woman), 397 (Gypsies) および 399 (Customs

of war) である。396 に相当するものは、NDC では 367 (家庭および婦人問題) に置かれ、397 は独立の目として扱わず、相関索引には “ジプシー (人類学) → 469. 82969” という項があるが、DC の 397 に対応するものは、むしろ “遊牧民 → 389” と解すべきであろう。他とのバランスから、ジプシーに独立の目を与えるほどの重要性があるとは考えられないので、NDC の措置は当然というべきであろう。DC の 399 を削除した措置についても同じことがいえる。

38 綱に関して、新訂 7 版を新訂 6-A 版と比較すると、381 (民俗学) が 380 に吸収されて空番となり、387 (礼儀作法, 社交) が分目として 385 に含められ、387 には “民間信仰と迷信 (俗信)” が新設されている。この範囲に関する限り、新訂 7 版の改訂は妥当といえよう。

NDC の 38 綱が、いわゆる民俗学をカバーするのに必要かつ充分であるか否かを検討するために、試みに、民俗学文献目録,<sup>8)</sup> 日本民俗調査要項,<sup>9)</sup> 大間知篤三の分類項目<sup>10)</sup> の 3 者と対照させてみると、族制, 労働, 生産技術, 物質文化 (民具), 遊戯などの面で NDC には欠ける所があるように思われる。将来の改訂に際しては、これらの諸項目に対して充分な考慮が払われることを期待したい。

38 綱と 36 綱 (社会学・社会問題) の間には教育の綱が置かれており、39 綱は国防, 軍事となっているが、社会学 → 教育 → 習俗・民俗学 → 国防・軍事という排列は、合理的とは思えない。教育をずらして社会学と習俗・民俗学を隣接させ、国防・軍事は政治に隣接させるほうが、社会科学の排列としてはよいのではあるまいか。

関連主題・項目の分散は一般分類法の避けぬ宿命であるが、文化人類学とその関連項目との遠近度を、DC と NDC の両者について比較してみたのが図 1 である。

このグラフでは、両分類表に共通して存在する 55 関連項目を横軸にとり、各項目の分類番号と文化人類学の分類番号 (DC では 572, NDC では 389) の数値差を縦軸としている。55 項目の排列順序は DC の分類番号によつたため、DC は線がなだらかに流れてみえるが、全体としては NDC の線が横軸に接近しており、類の排列における NDC の優位性が、このグラフでもある程度立証されているといえよう。

### III. Universal Decimal Classification

UDC (国際十進分類法) は DC を基盤として発展した分類法ではあるが、各種記号による標数の結合方式を採用している点で顕著な相違を見せており、さらに目以下の主題区分において少なからぬ差異を示している。

DC は文化人類学を含む人類学に 572 を与え、UDC もまた人類学に 572 を当ててはいるものの、その scope note<sup>11)</sup> によれば、572 は “the study of the natural history of man” 換言すれば形質人類学のみを対象とし、人類文化に関するもの、換言すれば文化人類学は 39 (民族学, 民族誌, 民俗学) に分類すると規定されている。

39 の区分は DC の 39 綱に倣っているが、399 (Customs of war) は削除している。未開の種族はそれぞれ独自の戦争習俗を持っているが、原住インディアンとの間に熾烈な戦闘を繰り返した経験を持つアメリカでは、戦争習俗は文化人類学のトピックとして相当のウエイトを持つものと思われる。DC が数少ない目の一つを戦争習俗に当てた背景には、このような事情があるようである。しかしながら、国際的にはそれほど大きな比重を占めるトピックではないので、UDC がこれを削除しているのは妥当である。

先述の scope note にも明らかなように、文化人類学

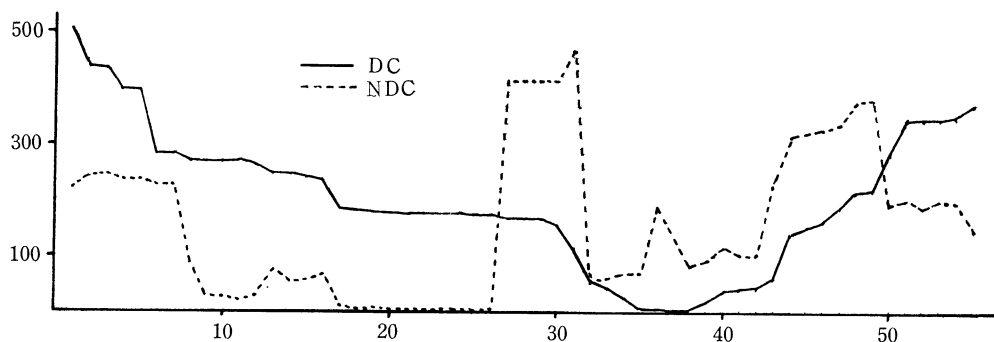


図 1. DC と NDC の比較

## 主要一般分類法における文化人類学の位置

は39に含まれているにも拘わらず、NDC389のような独立の目を与えられてはいない。従って、それは39の全体に亘って分散しているものと解されるが、その限りにおいて、UDCも文化人類学の冷遇においてDCに劣らない。DCを発展させる努力の形跡が見られないのは残念である。

小さな点を例示すれば、392(私的生活に関する習慣)は、簡略日本語版では次の如く展開されている。

- .5 結婚
- .51 結婚式, 婚礼
- .54 結婚の形式
- .543 近親結婚, 血族結婚
- .544 一夫多妻, 一妻多夫
- .545 一夫一妻制
- .6 性生活
- .61 恋愛
- .62 妾を囲うこと, 蓄妾
- .63 独身生活
- .64 雑婚, 重婚
- .65 売淫, 売春

この展開で問題となるのは、雑婚、重婚が性生活の細目として蓄妾や売春に挟まれていることで、これは .54(結婚の形式)の細目とする方がよい。 .6(性生活)は婚前、婚外性関係に限定すべきであろう。従って、.62(蓄妾)には、例えばアラブ諸国の合法的な複妻制は含まれないと考えるべきである。

UDCを最もよく特徴づけるものは、補助標数と各種の記号による連結方式であろう。補助標数の中で文化人類学に最も関係深いものは、場所を示す補助標数; 人種、民族および国籍の補助標数; 言語、国語の補助標数の3種である。

場所を示す補助標数は、山岳、河川、湖水、海洋、古代世界の場所、普通名詞としての各種の場所をも含んでいる点で、DCおよびNDCの地理区分にまさっている。海洋区分はNDCでは299目に用意されているが、DCには欠けており、551.46(Oceanography)の細目は海洋区分には使用しえない。地理区分に関しては、アジアを除き、DCの方がNDCよりも詳細であるが、いずれにせよ、与えられた分類番号の何処からが地理区分を示す番号なのか、利用者はいうにおよばず、ライブラリアンでさえ判断しにくいことが少なくない。この点は( )

その他の記号によって境界のみならず補助標数の種類をも明示しうるUDCがすぐれている。

人種・民族、国籍を示す区分はDC、NDCのいずれにも欠けている。これには地理区分で代用できるという考え方もあろうが、ハワイの日本人、日本の朝鮮人、マレーシアのシナ人を例示するだけでも、問題がそれほど簡単でないことが理解できよう。雑多な民(種)族が混住する地域において特定の民(種)族をとりあげることの少ない文化人類学にとって、民(種)族の区分は不可欠のものなのである。UDCにおけるこの区分——補助表(f)は、補助表(c)の言語・国語補助標数と共通させている。それは「民族の細分は言語のそれと同じ<sup>12)</sup>」であるとの考え方に立っているからである。この共通部分以外に、補助表(f)は、(=081)原始民族、未開人、(=088)混血人種などの項目を設けている点で便利である。

補助表(c)は主分類標数4(言語学)で展開される各国語の分類に基づいている。各国語の分類に際して、DCとNDCは親近度および実用頻度の観点から排列順を決定しているが、UDCはその方式を斥け、語族による分類と合理的排列に努めている。とかく弱小言語は十把一からげで片隅に追いやられがちであるが、弱小言語民族を研究の対象とすることの多い文化人類学が必要とするのは、一般的な実用性に偏しない科学的な言語の分類である。

## IV. Library of Congress Classification

米国会議図書館分類法(LC)はアルファベットと数字の組み合わせによる非十進的方式をとっているが、文化人類学はG類に配属されている。G類(第3版)は次の諸網から構成されている。

- G 地理学(一般), 地図帖, 地図
- GA 数理地理学, 地図学
- GB 自然地理学
- GC 海洋学
- GF 人類地理学
- GN 人類学
- GR 民俗学
- GT 風俗, 習慣(一般)
- GV リクリエーション

これらのうち、文化人類学を構成するものはGN、GRおよびGTであり、地理学との境界領域となる人文地

理学, 社会地理学, 人間生態学はG Fとして置かれている。

中核となるG N(人類学)は次の如く区分される。

- 1—49 総記
- 51—211 形質人類学, 生体人類学
- 221—265 生理人類学
- 270—279 心理人類学
- 290—295 人類学(特殊)
- 307—686 民族学, 民族誌
- 700—875 先史考古学

以上の区分は, 形質人類学, 民族学, 先史考古学という3本の大きな柱に整理することができよう。仮に民族学を文化人類学という語に置きかえれば, このグルーピングがD Cの571-573に類似していることが判る。しかしながら, 民俗学; 風俗, 習慣を直後に随伴させ, 筆者のいう文化人類学の諸分野——民族学, 民族誌, 民俗学——ならびに類縁分野たる形質人類学, 文化地理学, 先史考古学を一ヶ所にまとめている点において, L CはD Cとの間に決定的な相違を見せ, 少くとも文化人類学にとってはきわめて便利な体系を提供している。

次に社会学との関連を見てみよう。社会学はG類に接続するH類(社会科学)に属している。H類(第3版)はH(社会科学総記), H A(統計), H B-H J(経済), H M-H X(社会学)からなり, 政治はJ類, 法律はK類, 教育はL類として独立している。

社会学は次のように構成されている。

- H M 社会学総記, 理論
- H N 社会史, 社会諸事情  
社会問題, 社会改良
- H Q—H T 社会集団
  - H Q 家族, 婚姻, 婦人
  - H S 結社
  - H T 地域社会, 階級, 人種
- H V 社会病理, 社会福祉, 犯罪学
- H X 社会主義, 共産主義, 無政府主義

これらの綱のなかで文化人類学に密接な関連を持つものは, H M(101-121: 文明, 文化, 進歩)およびH Q—H T(社会集団)であろうが, いずれにせよ, これらの関連主題が, 経済を間に挟むとはいえ, G類に続いている

ことは全く好都合である。経済と社会学の順序が逆であれば, 文化人類学にとってはほぼ理想的な主題排列となる。

ここで解剖の焦点を婚姻というトピックに絞ってみよう。

民族学G N 400-499は習慣および制度にあてられ, 次の如く細分されている。

- 407—447 未開人の物質生活
- 451—477 未開人の精神生活
- 478—486 家族生活
- 488—495 社会生活
- 496—499 未開人の外交, 戦争

婚姻は家族生活に含まれ, 次の如く展開する。

- 480 婚姻, 家族, 血族関係
  - .1 婚約, 嫁資, 花嫁代償
  - .3 族外婚, 族内婚
  - .4 女家長制
  - .5 関係の度合
  - .6 一妻多夫婚
  - .7 レビレート婚
  - .8 複婚, 単婚
  - .9 家父長制

この展開はかなり詳細なもののように見えるが, 婚姻・家族に関する民族学のトピックとしては全く不十分である。問題を婚姻に限るとしても, 居住制に基づく形式区分(夫方居住婚, 妻方居住婚, 新居婚)や, 配偶者獲得の方式に基づく分類(掠奪婚, 購買婚, 労役婚, etc.)が無視されている。婚姻当事者の数的関係も重要であり, 乱婚, 集団婚, 複婚, 単婚などの項目があるが, L Cはそこから“複婚と単婚”をとりあげている。一妻多夫婚もとりあげられているが, それが複婚の一形式であるにも拘わらず, “複婚と単婚”に先行する独立の項目として扱われており, それに対応する一夫多妻婚が, より一般的でありながら, 複婚の中に埋没してしまっているのはおかしい。

480.7のレビレート婚は, 寡婦が亡夫の兄弟と再婚する形式であり, これに対応するものに, 寡夫が亡妻の姉妹と再婚するソロレート婚がある。レビレートは, わが国では一般に逆縁婚の名で呼ばれているが, ソロレート

主要一般分類法における文化人類学の位置

に対しては明確な呼称がなく、人によっては逆縁婚の中にそれを含めている。筆者は継承婚という新しい概念を設定し、レビレートを兄弟型継承婚と呼び、ソロレートを姉妹型継承婚と呼んでいる<sup>18)</sup>が、いずれにせよ、レビレートに番号を与えながら、ソロレートに与えないのは片手落ちというべきであろう。また、婚姻儀礼に関する項目が欠けている点も不備である。

一方、G T(風俗、習慣)の2660-2810は婚姻習俗にあてられているが、時代区分と地理区分からなり、トピックは設けられていない。ここには未開人以外の民族の婚姻習俗が分類される。

社会学の分野では、H Qが家族、婚姻、婦人に配当されており、その細目には次のようなものがある。

745	婚礼、形式等
800	独身生活
801	求愛
802	結婚仲介機関
803	試験婚、友愛婚
804	婚約の不履行
805	遺棄
806—808	姦通
811—960	離婚

現代社会の婚姻に関する題目として、これで充分であるとは見做し難いが、離婚に相当数の番号をさいている点に現代社会の特徴がよく表現されている。

なお、婚姻関係項目の直前に性関係(12-471)が置かれているが、これは民族学の婚姻関係項目の直前にも設けられてしかるべきものである。

L Cは、先述の如く、文化人類学に関連する主題のグループングにおいてすぐれてはいるものの、展開された細目には問題が少くないといえよう。

## V. Bibliographic Classification (Bliss)

アルファベットの各文字に1類をあて、計26類よりなるBlissのこの分類法では、文化人類学はK類に含まれる。このK類は、社会科学とはいうものの、社会科学総記と社会学のみからなり、教育はJ、政治はR、法律はS、経済はTとしてそれぞれ独立している。

K類の社会学(Sociology)は広汎な意味におけるそれであり、次の6綱によって構成されている。

一般社会学  
 心理社会学  
 記述社会学  
 社会民族学、社会人類学  
 民族誌  
 人類地理学、人文地理学

これらのうち、文化人類学の主体となる部分は次の如く展開する。

KE	社会民族学、社会人類学
KF	未開文化と民族考古学
KG	民族文化
KH	民族心理
KI	民俗学
KJ	伝統的慣習と儀礼
KK	口頭伝承
KL	ヨーロッパの民俗
KM	アメリカ移民の民俗
(KN)	アジア、アフリカ、オーストラリア、マレーシア、ポリネシア諸民族の民俗
KO	民族誌 総記、アフリカ諸民族
KP	インドネシア、オーストラリア、ポリネシア諸民族
KQ	アジア諸民族
KR	ヨーロッパ諸民族
KS	アメリカ諸民族、原住民

この主題群の特徴は形質人類学(H類)の分離にあり、その点において、D C、L Cと大きな相違を見せている。また、先史考古学(K F C)を社会民族学・人類学に含ませている点も興味深い。

民族学における(民)種族区分の重要性については前にも触れたが、B Cでは民族誌(K O - K S)が詳細な民(種)族区分を展開している。アフリカおよびアメリカの諸民(種)族に関して特に詳しいが、K P HのPhilippinesに例をとると、Aetas, Tagbuana, Igorot, Tagalogなどの13族に細分されている。これはほんの一例にすぎないが、その詳細な分類は実用に充分堪えうるものと思われる。ただし、世界のあらゆる民(種)族がここで分類されているわけではなく、ヨーロッパの諸民族およびアメリカ移民は民俗学(K L - K M)のもとで分類されて



表 3. BC の婚姻関係分類の比較

K C V	婚姻と求婚	K E F	民族社会の性関係と婚姻
A	婚姻の習俗, 儀礼, 制度	B	成熟, 適齡期, 処女性
C	求婚, 婚約	C	月経隔離
E	馳落	D	婚約
G	結婚式	E	婚姻の習俗, 儀礼, 等
H	結婚記念日	G	購買婚
I	雑婚	H	掠奪婚
J	近親相姦	J	乱婚
K	イトコ婚	K	複婚
L	国際結婚	L	一夫多妻婚
M	混血	M	ソロレート婚
P	児童婚	N	一妻多夫婚
R	契約婚	O	集団婚
T	試験婚, 友愛婚	P	ブナルア婚
V	離婚, 別居	Q	単婚
		R	レビレート婚
		T	族内婚
		V	族外婚, 族外婚階級

いる。換言すれば、アジア、アフリカ、オーストラリア、マレーシア、ポリネシアの諸民(種)族のみが民族誌のもとで分類されているのであり、これら諸民族の民俗は民族誌の中で扱うことを原則とし、特に民俗の項で展開する必要がある場合には、KNを使用することになっている。この使いわけは、民族学と民俗学の境界にかかわる問題だけに複雑であり、簡単に割り切れる性質のものではないが、一応現実的な方策といえよう。

婚姻に関する分類はKCVとKEFの2ヶ所に現われ、前者は社会学的研究、後者は民族学的研究にあてられている。表3は両者を比較したものである。

KCV(社会学的トピック)はさておき、KEFには購買婚、掠奪婚などの配偶者獲得の方式によるもの、乱婚、複婚、単婚という配偶者の数的関係に基づくもの、族内婚、族外婚という配偶者の選択範囲による分類が用意されている。しかしながら、一方においては、居住制に基づく区分が欠けていたり、また、ソロレート婚が一夫多妻婚に属する項目としてあげられていながら、それと対応関係にあるレビレート婚が単婚の下位概念として置かれているなど、首肯しがたい点がある。前者を一夫多妻婚の一形式としてとらえるならば、後者は一妻多夫婚の一形式としてとらえるべきであろうし、後者を単婚に含めるならば、前者も同じく単婚に含めるべきであろう。この混乱は、対象的な婚姻形式である両者を数的関係に

よる分類の中におしこめたことに基因している。

近親相姦がKCVにありながらKEFにはない。また、重要なトピックである労役婚、イトコ婚などが脱落していることも納得しがたい。

とはいえ、BCの婚姻関係分類はLC(GN 480)にまさっており、DC、NDC、UDCのいずれよりも遙かにすぐれている。そしてこのことは単に婚姻に限らず、文化人類学全般についてもいえるであろう。特に、社会学との密着によって、他の分類法には欠けた幾多の特色を発揮している点は高く評価しなければならない。

### 結 語

その主題が何であれ、一つの専門領域の立場から見た場合、いかなる general classification も、それが linear に展開されざるをえない限り、満足しえないものであることは明白である。ところで、図書分類法に対する主題専門家の不満は、一般に考えられているように分類の深度の不足にあるというよりは、むしろ関連主題の散在にあると考えられる。主題専門家は関連項目のすべてを彼自身の視角でとらえ、とらえられた項目のすべてが体系的に集合することを要求する。彼は貪欲であり、その意味において彼を満足させる一般分類法は存在しない。そこで彼は彼を満足させるような専門分類を夢みる。それは雑木林ではなく、賑々しく枝葉をつけた一本の大

樹である。具体的な設計にとりかかってみて、彼はほとんどすべての主題が目に見えぬ細い絹糸で彼自身の専門主題につながっていることを認識するはずである。一本の樹を支えるために必要な隠された根の深さと拡がりに、彼は困惑し、意気沮喪する。彼の夢見た大樹は、現実には林の中の雑木の一本にしかすぎないのであろうか。それとも近年流行のファセット分類ならば、この問題を解決してくれるのであろうか……。

研究者の心の片隅を占めているこのような疑問が本稿執筆の前提となっている。文化人類学という領域からのみ主要一般分類法を論じたのもそのためである。本稿では専門分類やファセット分類はとりあげなかった。これらについては次の機会に論じたいと思う。

図書分類に対する主題領域からのアプローチに対しては、図書分類と知識分類の相違を強調する立場からの批判が当然予想されるが、図書分類はそれが主題分類である限り知識分類を基礎とするものであり、両者の間に本質的な差があるとは考えられない。これについては藤川正信氏が「主題探索の基本問題 (I)」<sup>14)</sup>において詳細に論じているので、同論文を参照していただければ幸いである。

- 1) 柳田国男, 折口信夫. “民俗学から民族学へ——日本民俗学の足跡を顧みて——”, *民族学研究*, 14 卷, 3 号, 1950. 2, p. 173.
- 2) 岡 正雄, 等. “日本民族 = 文化の源流と日本国家の形成”, *民族学研究*, 13 卷, 3 号, 1948. 2, p. 207-77.

- 3) “日本民族学会の成立,” *民族学研究*, 29 卷, 1 号, 1964. 8, p. 63.
- 4) Kluckhohn, Clyde. 江 実訳. “人類学の諸分野——その周辺諸科学にたいする関係について—— [Some remarks on the branches of anthropology and on antropology's relation to other disciplines]” *民族学研究*, 14 卷, 1 号, 1949, p. 1.
- 5) Malinowski, B. K. *Social anthropology*. <*Encyclopaedia Britannica*. 1951. Vol. 20.> p. 862.
- 6) Coates, E. J. “The decimal classification, edition 16: Class 300,” *Library Association record*, vol. 62, no. 3, Mar. 1960, p. 85.
- 7) Dewey, Melvil. *Dewey decimal classification and relative index*. 16th ed. Lake Placid Club, N. Y., Forest Press [1958] Vol. 1, p. 1052.
- 8) 大間知篤三, 等編. 日本民俗学の調査方法, 文献目録, 総索引. 東京, 平凡社, 1960. p. 159-363. (日本民俗学大系, 13)
- 9) *Ibid.*, p. 109-57.
- 10) 大間知篤三. “民間伝承とは何か,” *民間伝承*, 20 卷, 4 号, 1956. 4, p. 198-9.
- 11) *Universal decimal classification*. Complete English ed. London, British Standards Institution. Vol. 2, pt. 3, p. 35.
- 12) 国際十進分類法. 簡略日本語版[改訂第 2 版] 東京, 日本ドクメンテーション協会, 1960, p. 14.
- 13) 安西郁夫. “継承婚 (いわゆる逆縁婚) の本邦における分布,” *民族学研究*, 29 卷, 2 号, 1964. 10, p. 148.
- 14) 藤川正信. “主題探索の基本問題 (I),” *Library science*, no. 1, 1963, p. 117-9.